

デモクラシーなるもの——メンシエヴィキ、エス・エル、中には無政府主義者までが愚かにも此祭壇の前に平伏してゐる——が、ブルジョアジーに有利なものだけを説教する自由にすぎないことを示すものである。そしてブルジョアジーに有利なものとは、最も反動的な思想、宗教、反人文主義、搾取者の擁護等の説教である。

吾々は戦闘的唯物論の機關紙たらんと欲する同志が一般讀者のために、無神論の文書についての概要を載せ、且つそれ々々の特徴を示してくれることを希望するものである。各種の著作がどの讀者範圍に、又どの點で役に立つものか、又ロシア語で出版されてゐるものにどんな本があるか、(相當良い翻譯は少ないながら、あるにはあるようである)なほ出版すべき本にどんな本があるかを知らせるやうに心掛けねばならぬ。

戦闘的唯物論の使命を果たすために、最も大切なのは、共産黨に加入して居ない徹底的唯物論者と同盟することだが、之以上でないにしても、之に劣らず大切なことは、唯物論的傾向を有し、所謂「教養ある社會」に蔓延して居る觀念論懷疑論的な近代哲學の動搖に對して、唯物論を代表し且つ主張することを辭せざる自然科学者と同盟することである。

『マルクス主義の旗の下に』の第一——二號にアー・テイミリヤゼヴが發表したアインシュタ

イン⁽³⁾の相對性理論に關する論文は吾々をして、同志が第二の同盟をも實現するに至るべき希望を興へる。人は之に就ては、もつと注意を拂はねばならぬ。人は常に次の事を忘れない様にしなければならぬ。それは現代の自然科学が既に其の急激な轉回期を通過して、次第に反動的哲學の學派傾向に移りつつあると言ふことである。だから、自然科学の領域に於ける最近の革命がもたらしたすべての問題を注意深く研究し、又、自然科学者をこの哲學雜誌に協力せしめることは、その重大な任務であつて、之を解決しなければ、戦闘的でも唯物論的でもあり得ない。テイミリヤゼヴは同志第一號に於て、アインシュタインの理論が——テイミリヤゼヴの言葉によると、彼自身は別に積極的に唯物論の原理に反對して居ないとのことであるが——既に各國のブルジョア知識階級の大多數の代表者によつて利用されて居ることを認めざるを得ないと言つてゐる。之はアインシュタインに限つたことではない、十九世紀末以來の自然科学上の大改革者の大多數ではないが、随分多くのものがさうであつたのである。

だから、かういふ現象に對してハツキリした態度を取らうと思へば、是非とも次の事を理解して居なければならぬ、即ち確固たる哲學的基礎がなければ古臭くなつた自然科学や古臭くなつた唯物論の如くに、ブルジョア思想の襲來とブルジョア世界觀の再建に對抗することが出来ない。

言ふことである。この闘争に首尾よく勝利を得るためには、自然科学者は近代的唯物論者に、マルクスの主張した唯物論の信奉者に、即ち辯證法的唯物論者にならなければならぬ。このためには『マルクス主義の旗の下に』の協力者は、唯物論の立場から出發して、ヘーゲル^(四)の辯證法の系統的研究を組織しなければならぬ。此の辯證法は、マルクスが『資本論』並びに歴史上政治上の著作に應用して頗る成功して居る處である。東洋（日本、支那、印度等）では新階級が日々生命と闘争に眼覺めて行く、地球人口の大部分を占め、その歴史的不活動、歴史的睡眠のために、歐洲の幾多の先進國を停頓と怠慢におとし入れて居た數億の人民が眼覺めて行く——之等の新國民、新階級が日々眼覺めつつあることは、マルクス主義の正當なることを更めて證明するものである。

成程、上述した様なヘーゲル辯證法の研究、解釋、宣傳は容易な業ではない、この方面における最初の試みは嘸失敗が多いだらう。だが少しも失敗しないのは、何にもしないものだけだ。吾は、マルクスがヘーゲル辯證法を唯物論的に把握して應用した成果を土臺として、あらゆる方面に向つて、辯證法を發展させることが出来るし、又發展させなければならぬ、即ちヘーゲルの重要著作の抜萃を掲載し、これを唯物論的に解釋し、いかにマルクスが辯證法を應用したか、辯

證法の經濟政治方面に於ていかなる例があるか、近世史殊に帝國主義戦争と革命とがいかに豊富にこれを提供してゐるか、等についての實例を與へねばならない。『マルクス主義の旗の下に』編輯者及び協力者は「ヘーゲル辯證法の唯物論者的研究の會」と言つたようなものになるべきでないかと思ふ。近代的自然科学者は、唯物論的に解釋されたヘーゲル辯證法に（彼等が之を求むることを知るものとして、又此點に於て吾々が彼等を援助する方法を知るものとして）、今日の自然科学上の革命が提出し、且つブルジョアの流行物の知識的崇拜者共を「混亂」させ、反動の陣營に追ひ込んだところの哲學上の諸問題についての幾多の解答を發見するであらう。

唯物論が戰鬪的唯物論になる爲めには、かゝる任務に自ら當り、その解決のために組織的に活動せねばならぬ。之をしなければシュチュエドリ^(五)の言葉を借りるならば、打ち克つ唯物論でなく、打ち負かされた唯物論となつてしまふであらう。

優れた自然科学者がいつまでも辯證法的唯物論をとりいれないとすれば、彼等の引き出す哲學上の結論、普遍化は今迄通りに依然として慘めなものであらう。蓋し自然科学は頗る急激に發達し、あらゆる方面に亘つて深刻な革命的醗酵を遂げつつあるので、之を適當な哲學的根據におかなければ、今後の發展は不可能となつたからである。……

（雜誌『マルクス主義の旗の下に』第三號、一九二二年、から抜萃）

ロシア革命の鏡としてのレオ・トルストイ

大藝術家の名を革命と一所に並べるのは——彼は明かに革命を理解しなかつたし、また明かに革命の道から逸脱したのである——一見、奇異且つ不自然に思はれるかも知れない。だが一つの現象を明かに正確に反映しない何物かを鏡だと名付けることはできない。さて我が革命は一の非常に複雑した現象であつた。この革命における直接の民衆煽動者や参加者の大群のなかには、事件の意味を明白に理解もせず、また事件の過程中に吾々の荷ふた眞の歴史的任務を無視するが如き、多くの社會的要素があつたのである。吾々はこゝに一人の眞に偉大な藝術家を取り扱ふのであるが、彼と雖も少くとも革命の最も根本的な二三の方向を彼の著作中に反映せざるを得なかつたのである。

ロシアの合法新聞はトルストイの八十歳の誕生日に論文や書翰や覺書の類を満載してゐるが、ロシア革命の性質及び推進力といふ見地から彼の著作を分析してゐるものは殆んどない。これらの全新聞は嘔吐を催すほど偽善に充ちてゐる。しかり、それは二通りの、官廳的及び自由主義的の偽善だ。第一のものは商人のようなヘボ記者の下劣な偽善であつて、彼等は昨日はトルストイを狩り立てるといふ命令を受け、今日はトルストイから愛國心を發見して、能ふ限り歐羅巴の前に威嚴を繕へと命令されてゐるのだ。この種のヘボ記者が其無駄書きの骨折賃を奪ひ合つてゐるのは誰の目にも明かなことで、誰れも彼等から誘惑されはしない。だが、より狡猾であり、従つてより有害且つ危険なものは自由主義者の偽善である。「リエーチ」に於けるカデツトの笛吹きを聞いてゐると、彼等がいかに満腔の暖い同情を以てトルストイに對してゐるように見える。實際に於ては、「偉大なる神の探究者」といふ勘定づくの宣言や大げさの空文句は詐欺にすぎないのだ。といふのは、ロシアの自由主義者はトルストイの神を信じもしないし、現存秩序に對するトルストイの批判に同情もしてゐないからである。彼等自由主義者がこの有名な名前に接近するのは、彼等の政治上の小資本を増し度いためであり、全國民的反抗運動の指導者の役割を演じ得んが爲めである。彼等は空語を怒鳴り立てることに依つて、「トルストイ主義」に於ける莫大な矛盾がどこから生じたか、その矛盾が吾々の革命のいかなる缺點、いかなる弱點を表現してゐるかといふ問題の公然且つ明白な答辯の必要を掻き消さうと努めてゐるのである。

トルストイの著作、見解、教理、その一派における矛盾は、事實上、驚くべきものがある。一

方に於て彼は天才的な藝術家であり、ロシアの生活の無比の形像のみならず、世界文學の第一流の著作を提供してゐる。だが他方に於て彼は地主であり、キリスト信者の痴人である。一方では社會の虚偽と無恥とに對する如何にも激しき、突き込んだ、誠實な抗議をしてゐるが、他方では一人の「トルストイ主義者」であり、即ちロシア・インテリゲンチヤと呼ばれる、氣力廢頹したヒステリーの泣虫であり、公然と胸を打つて「私は悪人である、私は呪はしい人間である、だから私は道徳的の自己完成につとめてゐる、私は決してもう肉食をしない、私は今日、米のカツレツで身を養ふ」などと言ふのである。一方では資本主義的搾取を忌憚なく批判し、政府の暴行や裁判や行政の喜劇の假面を剥ぎ、富と文明の成果との増大と労働大衆の貧困、野獸化、苦痛の増大との間の矛盾の最も深刻な根據を曝露してゐるが、他方では「惡に抗するに暴力を以てする勿れ」といふ愚劣な説教をしてゐる。一方に於ては最も醒めたる現實主義を以てありとあらゆる假面を剥ぎとるのであるが、他方では世界中での最も卑しい事柄即ち宗教の説教者である——それは官廳的の法王の代りに倫理的確信を持った法王を据へようとする努力であり、換言すれば最も狡猾な、従つて特に嫌悪すべき僧侶主義の培養に外ならない。まことに

おお汝、憐れなる、されど祝福せられたる

おお汝、力ある、されど力を失へる

母たるロシアよ！

である。

かくの如き矛盾を藏するトルストイが労働者運動と社會主義のためのその役割とを、またロシア革命を、理解し得なかつたのは明かである。だがトルストイの見解と教理とに於ける諸矛盾は決して偶然ではなく、むしろロシアの生活が十九世紀の最後の三分の一に經驗した、かの矛盾に充ちた條件の反映なのである。昨日やつと農奴制度から解放されたばかりの家長的村落は、資本と國庫とから文字通りの掠奪を蒙つた。農民經濟と農民生活との舊い基礎、事實上に數世紀の間維持せられてゐた基礎は、忽然として異常の破滅をしてみた。トルストイの見解における矛盾は近世的労働者運動や近世的社會主義の見地から批判されるべきでなく（かゝる批判は勿論必要であるがそれだけでは足りない）、むしろロシアの家長的村落において成立せざるを得なかつたところの、かの襲來せる資本主義に對する抗議、大衆の零落と土地喪失に對する抗議といふ見地から批判されるべきである。人類救済の新しい妙藥を發明する豫言者としてのトルストイは、頗る囁ふべきである。だからトルストイの教理の最も弱い方面をドグマに高めようとしてゐるところ

の、外國及びロシアの「トルストイ主義者」は全く以て貧弱を極めてゐる。トルストイは、彼がロシアにおけるブルジョア革命の爆發の時代にロシアの農民の莫大な衆を把握した思想や氣持を表現する限りに於て、偉大である。トルストイは、彼の見解の全部が——全體として有害なものだが——正にブルジョア農民革命としての吾が革命の特殊性を表現してゐる故にこそ、獨創である。この見地より見れば、トルストイの見解における矛盾は、吾が革命の間に農民階級の歴史的活動を制約した所の矛盾に充ちた條件の眞の鏡である。一方に於て數世紀續いた農奴制度の壓迫と、改革（一八六一年の農奴解放をいふ——譯者）以後の數十年來の零落の増大とは、無數の憎悪と激昂と絶望的な決意とを作り出してゐたのである。公けの教會や地主を政府と共に地上から一掃し、土地所有のあらゆる形式と規則とを破壊し、土地を清掃し、警察的階級的國家の代りに自由同權の小農の共同團體を建設すること——此努力が一脈の赤き糸の如く吾が革命における農民の歴史的な一歩々々を貫いてゐたのである。そして疑ひもなくトルストイの精神的内容はむしろ農民の此努力が抽象的な「キリスト教的無政府主義」——彼の見解の「體系」はそれを以て評價せらるべきである——の形をとつたものである。

他方に於て農民は、この共同生活の新しい形勢をめぐけて努力するに際して、この共同體がい

かなる形のものでなければならぬか、いかなる闘争を通じて自由を戦ひとらねばならぬか、農民はいかなる指導者をこの闘争に持たねばならぬか、ブルジョア階級とブルジョア知識階級は農民革命にいかなる態度を採つてゐるか、何故に大地主の土地所有の否定がツアールの權力の強烈な破滅に必要であるか、等の問題について殆んど意識がなく、家長主義的に、痴人の如く之に對しただけである。過去全體は農民に、地主と官吏とに對する憎悪を教へたが、以上のあらゆる問題の答へをどこから捜し出すかといふことを教へなかつたし、教へることもできなかつた。吾々の革命に於ては、農民の極く少數部分が眞に闘争しただけであり、少くともこの目的のために何程かの團結をしたのであり、全く極く少數部分だけが武器を手にして彼等の敵の掃滅や、ツアールの奴隸や地主の擁護者の打破のために立ちあがつたのである。農民の大多數は泣事を言ひ、祈り訴へ、夢想し、請願狀を書き、「代辯者」を派遣した、——全くレオ・ニコライエヴィツチ・トルストイの精神に於て！——かういふ場合に常例であるように、トルストイの政治からの退却、トルストイの政治の否定、政治に關する興味と理解との缺乏等が齎らした結果は、農民の少數部分のみが階級意識ある革命的プロレタリアートに追隨したに過ぎなくて、その大多數はカデツトと呼ぶあの無原則の阿諛者たるブルジョア知識階級の喰物となつてしまつたのである。彼等はトルヴド

ヴィキの集會やストリピン⁽³³⁾の應接間に駆け込み、嘆願し、牛馬の取引をやり、妥協し、妥協を約束し——結局は軍隊の長靴の一蹴に逢ふて蹴散らされてしまった。トルストイの思想は吾が農民一揆の弱點と缺陷との鏡であり、家長主義的村落の浮動性と「經濟的小農」の索然たる卑屈性とを反映してゐるのである。

一九〇五—六年の兵士一揆を觀察しよう。わが革命に於ける之等の鬭争者は、その社會的成分からみれば、農民とプロレタリアートとの間の中間物であつた。プロレタリアートは少數を占めてゐたに過ぎぬから、軍隊内部における運動はプロレタリアートが示したが如く、一舉にして社會民主主義的性質を獲得するといふが如き、國家的規準においてすら果敢性や黨意識に接近するものでなかつた。だが他方に於て、兵士一揆の失敗の原因が士官階級からの指導者がなかつたからだといふ意見は、徹底的に間違つてゐる。反對に、『ナロドナヤ・ヴォリヤ』以來の革命の偉大な進歩の現はれてゐるのは、「悲惨な家畜的道具」が武器をとつて命令に反抗したことであり、自由主義地主や自由主義士官を驚倒せしめた自主性の要求であつたのである。兵士は農民の事柄に滿心の同情を有し、農村に關する單純の報告にも彼等の眼は燃え立つた。軍隊内における權力は屢屢兵士大衆の手に移つたのであるが、此權力を決定的に利用することが殆んど無かつた。兵士は

動搖してゐた。彼等はその捕縛した二三の上官を殺した數時間後には他の上官を釋放し、官廳と協定を行ひ、それから銃殺の刑を受け、笞刑を受け、そして再び自己を羈絆に繋いだのである、——全くレオ・ニコライヴツチ・トルストイの精神に於て！

トルストイは積り積つた憎悪や、より善きものへの成熟した努力や、過去から自己を解放せんとする希望を挑發したが——だがまた生半可な夢想主義や、政治教育の缺乏や、革命的浮動性やを再び提供してゐる。歴史的經濟的條件は、大衆の革命的鬭争の成立の必然性や、この鬭争の準備の缺乏や、「惡に抗する勿れ」といふトルストイ主義が第一の革命的鬭争の失敗の全的な第一原因であつたことを明瞭にしてゐる。

人は、慘敗した軍隊は善く學ぶといふことを言ふ。革命階級と軍隊を比較してみても、たしかに是れは一定範圍に於ては正當である。資本主義の發展は、一瞬毎に諸條件を變化し、尖銳にし、農民の數百萬の大衆を奴隸の所有主たる地主と政府とに對する共同的憎悪を通じて結束せしめ、革命的民主的鬭争に追ひ込んだのである。農民階級の内部に於てすら、商品交換の増大、市場の支配、貨幣の力は常に益々家長主義的舊狀態と家長主義的哲學觀念を驅逐してゐる。だが疑ひもなく、革命第一年の、また革命的大衆鬭争の第一次の失敗は、大衆の軟弱と脆弱とに死の衝撃を

與へたといふ成果を持つてゐる。分界線は益々鋭くなつてきた。諸階級と諸政黨とは互に對抗するに至つた。ストリピンの與へてくれた教訓のハンマーの下に於て、革命的民主々義者の不撓不屈の徹底的アヂテーションに依つて、たゞに社會主義的プロレタリアートのみならず、民主々義者たる農民大衆が不可避的に益々鍛へ上げられた闘士となつて起つであらう、トルストイ主義のわが歴史的の罪に陥ることなしに！

〔プロレタリア第三十五號、一九〇八年九月十一日〕

レーニンのゴルキイへの二つの手紙

—

一九一三年十一月十四日

親愛なるアー・エム・！

君は一體何をやるのだ？——あんまり驚かせる！

昨日僕は『レーチ』で、ドストエフスキーのことから起つた「咆哮」についての君の返答を讀んで既に喜んでしまふところだつた。ところが今日、解黨派の新聞がきて、そのなかに『レーチ』に載つてゐなかつた君の論文の一節が印刷されてゐるのだ。

この一部といふのは次のものだ。

「だが人は「神の探究」を暫く（ほんの暫く？）延ばさねばならぬ。——それは目的なき勞作である。誰れにも與へられてゐないとすれば、その目的を捜すことはできない。種々蒔かぬ者は收穫することはできぬ。諸君は神を有しない、諸君はまだ、（まだ？）神を創造してゐないのだ。神は人の捜すものでなくて——人が神々を作るのだ。生活は人の案出するものでなく、人が生活を作り出すのである。」

だから、君がほんの「暫く」だけ神の探究に反對するにすぎない、といふことになるのだ！ 君が神の探究に反對するのは、たゞ神の探究に神の創造を置き換へたいばかりからなのだ！ かうして君の言葉から出てくるものは、正に恐るべきものがあるではないか？

神の探究が神の構成又は神の創造などといふものから異つてゐるのは、丁度、黄色の悪魔が青色の悪魔と異つてゐるようなものだ。すべての悪魔と神々に反對するため、すべての精神的姦屍症に

レーニンのゴルキイへの二つの手紙

反對するため——(すべての神は姦屍症を意味するのだ、最も清浄な、最も理想的な、探究されたものでなく創造された神であらうとも結局同じものだ)——でなく、單に黄色の悪魔から青色の悪魔を選び出すために神の探究に反對するといふのは、神のことを全然口にしないよりは百倍も悪い。

最も自由な國々、「民主々義への、公明と科學への」呼び聲が全然揚げられてゐないような國々、かやうな國々(アメリカ、スイス等、等)に於ては、民衆並に勞働者は、正にこの純潔にして精神的な、全く創造的な神の觀念によつて最も執念深く愚蒙にされてゐるのだ。その理由は正にすべての宗教觀念、すべての神に關する觀念、一神についてのすべての媚態さへもが——民主々義ブルジョアジーの特に好んで我慢する(屢々好意を以て採用さへもする)ところの、筆舌に絶した陋劣事であるからであり、正に最も危険な陋劣事であり、最も忌はしい「傳染病」であるからだ。百萬の肉體的な罪惡と不潔と暴行と傳染病とは、多くの人々によつて遙かに容易に假面を剥がれるものであり、それ故に、かの典雅にして精神化された「觀念の衣装」によつて最も美しく飾られた神の觀念よりもより少く危険なのである。少女を姦したカトリックの坊主(それに関する記事を私はあるドイツ新聞で今偶然に讀んだところだ)は、「民主々義」に取つては、あのミサの式服を着けて居ない坊主、粗野な宗教を持つてゐない坊主、神の創造と正持とを説く空想的な民

主々義的坊主よりも、遙かに危険が少いからだ。何となれば、第一の坊主の假面を剥ぐのは容易であり、彼を裁き、そして放逐することは困難でない。——だが第二の坊主はしかく簡單には放逐されない。——彼の假面を剥ぐことは千倍も困難であり、「脆弱な憐れな無定見の」小市民は、決して彼を「裁く」用意を持つてゐないからだ。

然るに君がロシアの俗物的ブルジョア的な精神(なぜロシアのなのだ?イタリヤのはもつと上等なのか?)の「脆弱性と憐むべき無定見と」を知つてゐる君が、これらの精神を最も甘つたるい、砂糖菓子と種々の無駄話とで最も善く包み隠した毒で以て昏迷させるのだ!

全く驚くべきことだ。

「我々の方では、自己批判に代へるのに自己面唾をすることは澤山だ。」

そして神の創造は恐らく最悪の自己面唾でないのか?? 神の構成に忙しい人間又は聊かでもさういふ構成を許す一切の人間は、最悪の方法で自己面唾をやつてゐるのだ。彼は行動に忙しいのでなくて、正に自己観察と自己映鏡とに忙しいのであり、その際の「自我」——彼はそれを神の創造で以て神化しようとしてゐる——の最も不潔な、最も魯鈍な、最も奴僕的な風采又は顔つきを恍惚として「打ち眺めて」ゐるのだから。

個人的觀點でなしに社會的觀點から見ると、一切の神の創造は、魯鈍な小ブルジョアの、脆弱なる俗人の、「絶望困惑せる」(その精神について君は非常に正當に言つてゐるのだが——たゞ君は「ロシアの」でなく、小市民の精神一般について語るべきであつたばかりである、何となればユダヤ人もイギリス人も、髪の毛一すじだつてよくは無いのであるからだ、彼らはどれもこれも同じである、下等な小ブルジョアはこの國だつて下等である、だが觀念的姦屍症者である「民主主義的小ブルジョア」は二倍も下等である。夢見がちな「自己面唾しつつある」素町人と小ブルジョアの愛情深い自己觀察以外の何ものでもない。

私は君の論文を熟讀して、かやうな過誤がどうして君に生じたかを検討した——そしく驚くのだ。それは何だ？ それは、自身がもはや許してゐない君の「懺悔」の殘滓であるのか？？ それの揺り返しであるのか？？

それとも別の何ものか——例へば、無産者的立脚點を探るかほりに、一般的な民主主義的立脚點にまで身をかゞめようとした試みの失敗したものであるのか？ 恐らく君は、「民主主義一般」に就いての話を可能ならしめるために、人がよく子供にするやうに(かうした表現を許し給へ)鳥渡「チユツ、チユツと言」つて見ようとしたのであるのか？ 若しかしたら君は、素町

人のこの偏見を一寸の間、「通俗化」さうとも思つたのであるのか？

だがそれにしてもそれは、不正な、あらゆる意味、あらゆる關係に於いて不正な方法だ！
すでに私は、民主主義的諸國に於いて、「民主主義への、民衆への、公明と科學とへの」訴への聲がプロレタリア著述家側から全然出されて居ないと言ふことを述べた。さてそこでわがロシアでは？ かゝる呼び聲は全然出されて居ない。それはその呼び聲が何らかの方法で小市民的偏見に媚びて居るからだ。そんな曖昧な呼び聲ならば、「ルスカヤ・ミュイスル」の一人のイスゴエフ⁽³⁶⁾すらが兩手で以て署名するだらう。

何故君は、君自身は十分イスゴエフ主義から區別することを知つてゐるが讀者には區別することの出来ないやうなそんな合言葉を人に強要するのであるか？？ 小ブルジョア(脆弱な、あはれな無定見の、困憊せる、狐疑逡巡する、自分の顔を眺めて居る、神を眺めて居る、神を創造する、自己面唾する、粗笨無政府主義的小ブルジョア——なか／＼に華々しい言葉——だそしてまだ／＼ある)とプロレタリア(言葉に於いて勇敢であることを理解して居るばかりでなく、ブルジョアジエの「科學と公明」とを彼ら自身のものから區別し、ブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義から區別することを理解して居るところの)とを明確に分離する代りに、何の故

に讀者に向つて民主々義的目隠しを山盛りにするのか？

何故に君はこんなことをするのだ？

それは人の心をひどく痛ましめる！

君のヴェー・ウリヤーノフ

二

一九一三年十二月

神、神性其他これに連關する一切の問題に於いて、君の言ふことには一つの矛盾が現れて居る——それは、僕の考へによれば、カプリ島で僕等が最近、逢つた時、僕等の話の中で僕が指摘したのと同じ矛盾だ。君は「前進派の人々」から分裂した（或ひは分裂したやうに見える）、だがそれは「前進派の人々」の思想的根據をば見究めた上ではなかつたのだ。

今以てその通りだ。君は「腹を立てて」居る、君は「どうして「暫く」などといふ言葉が君の中から滑り出したのか理解することが出来ない」——さう君は書いて居る。しかも同時に君は、

神と神との創造とに關する思想を辯護して居るのだ。

「神とは、人類、民族、人間性によつて創造された諸々の觀念の複合體であつて、個人と社會とを結びつけ、動物的個人主義を制御する目的を以て社會的感情を呼びさまし且つ組織するものである。」

かゝる理論は明かにかのボグダーノフ⁽²⁾並びにルナチャルスキーの理論或ひは諸理論に連關する。

そしてしかもかゝる理論は明かに誤謬であり且つ明かに反動的である。キリスト教的社會主義者「社會主義」の最惡の變種でありその最惡の歪曲であるところの⁽¹⁾にならつて、君はかの（君の最善の意圖にも拘らず）法王の手品を繰り返してゐるのだ、即ちかの神性の觀念からして、歴史的に、及び生活の實踐のうち、に於いて、この觀念にへばり着いて來るところのもの（一方に於いては、悪じやれ、偏見、無智と威嚇との神聖化、他方に於いては農奴制と君主制）が鳴り出して來るのだ。しかもその際、神性の觀念の歴史的日常現實性の代りに、お人よしの小ブルジョアの文句が折り込まれるのだ（神イコール「社會的感情を呼びさまし且つ組織するところの諸々の觀念」）。

君はそれで以て何らかの「善と美を」語らうとし、「眞理——正義」を指示しようとし、なほその上にもさうしたものを指示しようと考へて居る。然しながら、君のこの敬虔な願望は、君の個人的所有、一個の主観的な「無邪氣な願望」たるに止まつて居るのだ。君が一旦それを書き下ろすや否や、それは大衆の中へと浸潤する。そしてその意味は、君の敬虔な願望を通してはなしに、社会的な諸々の力の交互關係を通じて、階級と階級との客観的交互關係を辿して決定されるのだ。かゝる交互關係の力は（君の意志に反し、君の意識からは獨立に）自ら次のことを證明するのだ、それは君が、坊主の、プリシユケウイツチの、ニコライ二世の、そしてストルーヴェ先生の思想をば、之に白粉をなすくり砂糖をまぜて再現するものであることを證明するのだ、何となれば、神性の觀念なるものは、事實に於いて、これらの人々が人民を奴隷にして置く事を手助けするものであるのだから。君が神性の觀念を粉飾することによつて、君は、無智な労働者と農民とを縛りつけて居るところのあの鎖をば粉飾することになるのだ。「よく／＼眼をとめて見るがいゝ」——あの坊主の奴原が言ふだらう——「これは（神性觀念と申すものは）何といふ美はしいそして深い思想でござらうぞ、それは「お前がたの」民主主義者の方々さへもが、指導者さへもが承認してござる——さうしてわし共は（坊主の奴原は）實にこの思想にお仕へ申すものなのぢや。」

神とは社会的感情を呼びさまし且つ組織するところの諸々の觀念の複合體である、といふのは正しくない。それは觀念の物質的根據について沈黙するボグダノフ流の觀念論だ。神とは（歴史的にもまた實際的にも）何よりも先づ、人間の魯鈍な被壓迫性と外界の自然と階級抑壓とを通して生み出された諸々の觀念の——この被壓迫性を強固にし、階級闘争をこまかし去らうとするところの諸々の觀念の複合體なのだ。神性の觀念のかくの如き淵源とかくの如き事實上の意義とも拘らず、民主主義及びプロレタリアートの闘争が、一個の宗教的思想の他の宗教的思想に對する闘争といふ形態を取つて生じて來たといふ時代が、なる程歴史にはあつた。

しかもかゝる時代は久しい過去に流れ去つたのだ。

ヨーロッパに於いてもまたロシアに於いても、一切の神の觀念は、最も洗練された最も善意な神性の觀念の辯護乃至是認と雖も——今日は遂に反動の是認なのである。

君の全定義は終に反動的でありブルジョア的である。神——「個人を社會に結びつけ、動物的个人主義を制御しようとする目的を以て、社会的感情を呼びさまし且つ組織する」諸々の觀念の一複合體。

何故にそれは反動的であるか？ 何となればそれが、動物性の「制御」を以て粉飾された坊主

並びに農奴制擁護者どもの觀念であるからだ。

神性の觀念は、現實に於いて、かつて「動物的個人主義」を制御して來なかつた。それを爲したのはかの原始的群族であり、また原始的コミュニオンであつたのだ。神性の觀念は「社會的感情」をば常に寝かしつけ、鈍感にし、且つ生けるものをば死せるものによつて置き換へたのである、それは神性の觀念が常に奴隸制（最悪の、救ひ道のない奴隸制）の觀念であつたからだ。かつて一度たりとも神性の觀念は「個人を社會に結びつけ」はしなかつた、むしろ却つてそれは、常に被壓迫階級を、壓迫者の神性に對する信仰を通して縛りつけて來たのだ。

君の定義はブルジョア的だ（そして科學的でなく歴史的でない）、何となればそれが、曖昧模糊たる、一般的な、「ロビンソンめいた」諸概念一般を以て説明せられ——特定の歴史的時代の特定の階級に結びつけて説明されて居ないからである。

一人の未開人、一人のシリヤ人（及びまた一人の半未開人）その他に取つて、神性の觀念はなる程それ自身一つの事だ、だがストルーヴェの一派に取つては——別の事なのだ。どつちの場合にしても、この觀念を支持するものは階級支配だ（そして階級支配はまた此觀念によつて支持される）。愛すべき神及び神的なものに就いての「通俗的」概念は、ツアールに關する、狒々に關す

る、正妻の鞭に關する通俗的表象』と全然同一の「通俗的」な魯鈍、被虐待、無智である。どうして君が神に關する「通俗的表象」を一つの「民主々義的表象」と名づけ得るのか、私には絶對に不可解である。

哲學的觀念論は『常に個人の利益のみを眼中に置くものである』といふこと、それは正しくない。デカルトはガッセンデイに比べて個人の利害をより多く眼中に置いただらうか？ 或ひはまたフォイエエルバツハに比較してファイヒテ及びヘーゲルは如何？

「神の創造とは、個人並びに社會に於ける社會的諸契機のより一層の發展集積の過程で」あるべきである、といふこと、それはひとへに全く恐しいことだ！ 若しも自由がロシアを支配するならば——正にかうした事情の故に、純粹にブルジョア的な型と性格とを持つかうした社會學と神學との故に、全ブルジョアジーが君を看板にあげるであらう。

さて今日はこれで充分だ——さうでなくてさへ手紙はもう長くなつた。も一度私は君の手をしつかりと握る、健康を祈る。

君のヴェー・イー。

|| 註 ||

(1) 「宗教は民衆の阿片である」といふ言葉はマルクスの『ヘーゲル法律哲學批判』(一八四四年)にあるが、ボリシエヴィキは一九一七年革命の勝利後に、モスカウに於て、イベリヤ神母の有名な堂の向ひ側の壁に此言葉を鑿り込んだ。

(2) 中世紀に於て「異教徒」を確定し且つ所罰するために採用した手段。

(3) ドイツ帝國刑法一六六條もこの趣旨のものである。

(4) エンゲルスは『インテルナチオナルス・アウスデム・フォルクスシユタート』(一八七—七五年ベルリン、一八七四年、四四頁)に次の如く書いてゐる。「……だが然らずとすれば、最も簡単なことは、前世紀の立派なフランス唯物論文献を大衆的に労働者の間に流布せしむることにあるだらう。これらの文献は、内容形式ともにフランス精神が今日まで成し遂げ得た最高のものであつて、——當時の科學の狀態を念頭において見れば——それは内容から言へば今日からもなほ無限に高いものであり、形式から言へば二度とできそうもないものである。」

(5) この理由でブレハノフとレーニンとの起草したロシア社會民主労働者黨の綱領(一九〇三年)も單に「國

家からの教會の分離、教會からの學校の分離」とだけ書いてある。

(6) 黒百人團——通常、この名前は今日ドイツにある所謂ファシズムと非常に似てゐる、過去のロシアの運動を指してゐる。これに金を與へ且つ指導した連中は、純君主々義貴族及び反動ブルジョアジである。この團體(所謂「黒百人組」)は大部分、「下層」民衆層から成立してゐる。運動は殆んど階級意識ある労働者及び少數民族(特に猶太人)に向けられてゐた。

(7) 聖・宗務院はロシアの教會の上部に位してゐた國家官廳であつて、その成員はツァールから任命される。そこでツァールを代表した君主代理者は大臣の權利と地位とを有する僧籍以外の人間であつた。

(8) デューマ——とはツァール治下のロシアにおける最高の立法機關で、一九〇五年革命の産物であつた。第一(一九〇六年)及び第二デューマ(一九〇七年)は政府と衝突して解散された。一九〇七年六月三日に大臣ストリピンは、第二デューマの解散と同時に勅令を發し、憲法に違反して一勅令を發布して身分本位の選舉制度に改め、労働者と農民との選舉權を甚しく制限し、反面に大地主及び大ブルジョアジの選舉權を増大した。第三デューマ即ち「第三・六月・デューマ」はこの手段を以て多數の君主々義者を以て形成されるようになり、法定期間だけ繼續した。第四デューマは一九一七年革命のために解散せしめられた。

(9) フォイエエルバッハ(一八〇四—一八七二)——はドイツの哲學者であつて、ヘーゲルの弟子であるが、宗教組織の人間精神に對する支配を終滅せしむるが如き證明を立てた人である。(『キリスト教の本質』その他)人間の最高目標は人間自身及び地上生活のなかに在る。それ以外にいかなる生活もない。人間はその神

註

の表象に於て人間自身の理想化された種屬觀念を見るだけで、これを信仰裡に於て現實のものと思ふのである。フオイエルバツハは其唯物論的立場のために大學教授になる道を絶たれてしまった。(近く公にする拙書「唯物論者フオイエルバツハ」を見られ度し、譯者)

(10) オイゲン、ザユリング(一八三三—一九〇二年)——はドイツの哲學者、經濟學者である。彼は階級調和の立場及び社會的幸福に對する勞働階級の積極的參加といふ立場を代表する。

(11) フランキー主義者——フランスの革命家たり社會主義者たるフランキーの信者であつて、社會の變革が勞働大衆の意識的に組織された前進に依らずして、秘密の、範圍の狭い血盟者團體の一揆に依りて達成し得ると信ずる人々である。

(12) エルフルト綱領——ドイツ社會民主黨のエルフルト綱領は一八九一年にエルフルトにおける黨大會で採用されたもので、古いゴータ綱領に代つたものであり、多くの外國の社會民主黨の綱領の模範となつた。ロシアの黨の綱領もこれを模範にした。

(13) 百科辭典學者——とは有名なフランスの百科辭書(諸科學の事項別辭書)の協働者をいふ。この著作は全ての學問的材料を唯物論的精神を以て集成したもので、一七五—一七二二年にデイデオ及びダランベールの編纂の下に出版された。

(14) ナロドニキ——ロシア語「ナロド」(人民)から出てる言葉で「人民派」といふ意味である。本來は前世紀の七十年代の始めに親を捨て、生ひ立ちの環境を捨て、「人民の中に入り」、そこで手工業者、日傭勞働

者となつて民衆のなかに生活し、そこで革命的思想を宣傳したロシアの革命的インテリゲンチヤを言つた。後には一般的に、この基礎に立つた反マルクス主義的小ブルジョア革命主義的イデオロギー即ち所謂「ナロドニシエストヴォ」の信奉者たる所謂社會革命黨、人民社會黨、其他この型の政團がこれに屬してゐた。この流派は公然の反動革命にまで廢類した。

(15) 「ウエーチ」(標識)——は、神祕論及び革命的觀念論に墮して一九〇五年の革命年代の革命主義を喪失したブルジョア・インテリゲンチヤが一九〇九年に出版した論集である。その協働者は以前のマルクス主義者スツルツェエ、ブルガコフ等であつた。

(16) モスト(一八四六—一九〇〇年)——は一八七〇年代における有名なドイツの社會民主主義者であり、帝國議會の代議士であつた。社會主義鎮壓法の時代に、彼は無政府主義者となり、英國に移住し、更にアメリカに渡つたが、テロリスト的行動、暗殺といふが如き最も狂暴な闘争方法を宣傳してゐた。

(17) 舊信派——は十七世紀に正教國教會から分裂したものである。舊信派は古い書籍と慣習とを奉じ、同時に政治的集權に反對し、屢々ツァール自身の權力、官僚、新兵募集等を非難した。彼等はラーヂン及びブガチヨフの叛亂には強く參加した。故に彼等は政府及び教會の迫害を常に受けた。

(18) カデット——は立憲民主黨の略稱で、人民自由黨といふ名もある。一九〇五年十月に成立した。其綱領の主要點は、議會的君主政治、大土地所有の一部の「正當」の價格を以てする解除、勞働者の状態の向上、八時間勞働の實施し得る場所における實施等であつた。其の戦術は、自由主義者の日和見主義に附き物であると

ころの、大衆に對しては響きのよい反對派的文句を殊に革命的高潮期に際して振りまはすが、實は舊い権力と不斷に妥協を努むるものであつた。世界戦争にカデットはツァーリズムの侵略政策を支持した。

二月革命後、カデットは大衆から壓迫されて、共和國に賛成する宣言を出した。カデットは政府黨となり、その周圍にあらゆる反革命的要素を迅速に集めた。彼等はコルニロフ將軍のペテログラードへの反革命的進撃及び十一月革命に對するロシヤ及び國際ブルジョアジーの全闘争を支持した。

カデットの亡命者は今日分裂してゐる。ミリウコフを先頭とする左翼はパリにゐて、共和主義を捨てず、右翼社會主義とプロツクを結んでゐる。右翼カデットはベルリンで出る新聞「ルール」を中心に集まり、古い立憲君主主義の綱領に返り、君主主義者と同盟を結んでゐる。

(19) 十月黨——十月十七日同盟(註二十一を見よ)即ち反動大ブルジョアジー及びゼムストヴォ主義者中の右翼派の黨である。この穩健立憲主義團體はその成立の當初(一九〇五年)から直ちに反革命的態度をとり、白色恐怖政治及び軍事裁判を擁護した。この團體は第一及び第二デューマには何等の役割も演ずることができなかったが、彼等に非常に都合のよい選挙法に依つて選出された第三デューマに於て、彼等は政府黨の役割を演じ始めた。だが反動の方が一層増大したため、彼等も餘りに左翼だといふことになつた。十月黨は世界戦争中には領土併合と償金とを目がける「徹底的勝利までの戦争」といふ立場をとつた。一九一七年革命は直に十月黨員を反動の陣營に追ひ入れた。

(20) 一月九日——ペテログラードにおける所謂血の日曜日である。

一月三日にプチロフ工場で、解雇労働者の復職の手續きが遅いといふ理由で、一ストライキがおこつた。翌日には他の工場も之に加はり、一月六日にはストライキ参加者二十萬人となつた。ストライキは直に政治的性質を帯ぶるに至つたが、なほ平和的のものであつた。労働者は經濟的要求のみならず、憲法會議の召集といふが如き政治的要求をも提出した。當時、ツァールに對するロシヤ労働者の信任は未だ消滅してゐなかつた。そこでツァールに直接逢つて嘆願狀を渡さうといふ思想が成立した。労働者は僧侶ガボンの指導下に「ロシヤ工場労働者協會」の地區委員會を作つた。ガボンは前以てツァール及び内務大臣に書を送り、來るべき示威運動についての報告をなし、ツァールが毫も憂慮する必要のないことを保障した。政府はそれに答へなくて、一月八日に布告を發し、ツァールの宮殿附近に労働者が接近してならぬこと、市内は軍隊で警固することを公布した。一月八日の深更に知識階級から送られた委員が大臣ウイッテを訪問し、鮮血を流すことを妨げるように嘆願したが、その委員は何等きかれるところなく却て捕縛された。一月九日には數十萬の労働者が冬宮の前に集まつた。其行列にはツァールの寫眞やキリストの像や教會の旗などを捧げてゐたものもあつた。既に既にナルヴァ凱旋門の附近でプチロフ工場の労働者は銃火を浴びた。澤山の死人ができた。——ガボン自身も社會革命黨員ルーテンベルヒに助けられて逃れることができた。(一九〇六年の初めに、ガボンが政治警察と關係のあることが暴露せられるや、同じルーテンベルヒの手に依つて殺された。)——労働者はそれにも拘らず行進を續けた。冬宮の前では一齊射撃が行はれた。示威運動者の銃殺と追捕とが終日行はれた。數千人の死者があつた。男も女も子供もあつた。民衆は憤怒し、ツァールに對する信仰が消滅した。最初平和的であつた運動も革

命的性質を帯ぶるに至り、全國に擴大した。一九〇五年ロシア革命の第一歩はかうして始まつたのである。

(21) 一九〇五年十月十七日にツァール政府は一宣言を發表し、ヂューマを作ること、ブルジョアの自由を確保すること等を約束した。宣言は次第に増大した革命運動の産物であつた。

(22) 「ゴロス、モスクヴィ」(モスカリの聲)は十月黨の日刊新聞で一九〇六年より一九一五年まで續き、ツァールの政策を支持してゐた。

(23) ナドロナヤ、ウオリア(國民の意思)——はロシアの革命的ナロドニキの黨であつたので、一八七九年に創立された。ナドロナヤ、ウオリアはその宣傳的活動を主として學生、軍人、それから労働者の間にも行つた。だが彼等は根本的には一の厳格な陰謀的血盟者團體であつた。專制支配に對する彼等の闘争戦術はテロアであつた。この戦術はナドロナヤ、ウオリアにとつて不可避のものであつた、といふのは、この闘争が大衆の支持がなくてロシアの絶對專制主義の全権力と戦ふ革命家の小團體の英雄的格闘を意味してゐたからである。ナドロナヤ、ウオリアの執行委員會の決議に依つてアレキサンダー二世が暗殺された。同時に同執行委員會はアレキサンダー三世に書を送り、大赦、民主的自由、憲法集會召集等を要求した。八十年代の半ばにナドロナヤ、ウオリアはツァール政府に依つて粉碎せられた。

(24) 「シーチ」——十月革命までのカデット黨の中央機關紙。

(25) ベーター、スツルーヴェは一八九〇年代の社會民主主義者でロシア社會民主労働黨の第一の黨大會の起草にも參加した。だが今世紀の始めに、彼はマルクス主義を捨て、自由主義者の陣營に移つた。カデット黨の

成立した時には中央委員會の一員となつた。一九〇五年の革命惨敗後には自由主義者中の極右翼の指導者となり、終には極反動的國民主義にまで乗り上げた。彼は一九一七年革命後の内亂時代にはデニキン將軍の白衛軍政府に參加し、後にデニキンの後繼者たるウランゲルの許に於て大臣となつた。

(26) ミリウコフ——ロシアの自由主義ブルジョアジーの指導者、大學教授、史學家、マルクス主義に反對しロシアの歴史的発展過程の特殊性の主張者。一九〇五年の革命に於て、彼は革命運動の指導者であり、カデット黨の組織者であり、指導者であつた。第三及び第四ヂューマに於て、彼はツァール政府に對する自由主義者及び日和見主義のオツボヤシオンを指導した。世界戦争中、彼は「最後の勝利までの戦争」の熱狂的な主張者となり、ダーダネルス、ボスボラス、ガリチヤ、東プロシヤ、アルメニヤの領土併合を主張した。ツァーリズムの崩壊後、彼は假政府の外務大臣となり、侵略政策を繼續した。革命的プロレタリアートの蜂起した結果、彼は一九一七年四月に辭職した。内亂時代には彼はソヴィエット・ロシアに對する反革命的行動の刺激者であつた。今日、彼はバリに於てカデット黨の「民主主義團體」を指導してゐる。

(27) トルウドヴィキ(「労働者」團)——は、その綱領から見ても構成分子から見ても頗る曖昧であつた所の、ヂューマ内の一團體である。トルウドヴィキは急進的な小ブルジョア特に中農の氣分を代表した。ヂューマにおける其活動の當初には、カデットに追隨してゐたが、後にはカデットの日和見主義的戦術に反對し、屢々社會民主主義者のフラクシオンと提携した。世界戦争中、彼等は「母國防衛主義者」であつた。トルウドヴィキのフラクシオンの代表者はケレンスキーであつたが、彼は二月革命後に首相及び陸相となつて、滅びゆくブル

シヨア社會秩序を救はうとする無駄の努力をした。

(28) 『マルクス主義の旗の下に』をいふ。この雑誌はロシアで出版されてゐる哲學的及び政治經濟的雜誌であつて、一九二五年以後、ドイツ語でも出版されてゐる。

(29) テイミリヤゼヴ——モスカウ大學の教授で、世界的名聲を有する學者であり、十月革命以後、直にソグイエツト權力に服した。

(30) アインスタインの相對性理論、「相對性原理は、絶対に靜止してゐることを證明し得るものは一つもないといふ事實から出發する。故に次の如き原理が生ずる、即ち自然法則、換言すれば空間、時間、物質の間の關係はその關與する物體の運動状態とは無關係でなければならぬ。

これからの結論は、空間と時間とは物質と其運動とを通じて決定される(それと共に彼等の間の關係が不變である)といふことである。」

(31) ヘーゲル(一七七〇—一八三一年)——はドイツの哲學者であつて、觀念論的進化論の最も重要な代表者である。「ヘーゲルにとつては、彼が「^{イデー}想念」といふ名の下に於て一の自主的主體たらしめた所の思惟過程が、現實世界の創造者であり、現實世界はその外部的現象を形成するにすぎぬ。これに反して余にありては、觀念とは人間の頭腦の中で變形され翻譯された物質に外ならない。」(マルクス、資本論第一卷第二版序文)

(32) スチチエドリソ——ロシアの有名な諷刺作家。

(33) ストリビン——一九〇五年後の反動時代の首相。彼の政策は「先づ鎮靜、それから改革」といふ彼の言

葉に現はれてゐる。彼は労働組合の破壊、政治的自由の廢除、労働者新聞の撲滅等に依つて「鎮靜」しやうと試みた。彼の改革は富農を村落團體から分離させ、これを個々の農場に移住せしめ、是に依つて充分生活の保障された農家經濟を作り、以て農村をツアアリズムの支柱たらしめんとしたことに在る。彼の政策はブルジョアジーの右翼に依つて支持せられた。

(34) 『ノーヴァヤ、ラボータ、ガゼッタ』(新労働者新聞)のことを指す。

(35) 『懺悔』はゴルキイの小説。

(36) アー、イスゴエフ——九十年代の半ばにおけるマルクス主義雑誌の協働者。後に彼はガデット黨の最も反動的な記者となつた。論集『ウエーチ』の協働者であり、また『ルスカヤ、ミウスル』がスツルヴェエの指導の下に革命運動に對する思想上の反革命主義及び最も悪意ある闘争の最も卓越した機關紙であつた時代の不斷の協働者であつた。

(37) ボグダノフ——舊いロシアの社會民主主義者。特に哲學的方面に於ての著述家として活動したが、その方面では彼の「獨得」の哲學的體系を基礎付けやうと試み、經驗批判論に墮落した。即ち彼はマツハ及びアヴエナリウスの觀念論的流派の信奉者となつた。レーニンの『唯物論と經驗批判論』はボグダノフを反駁したものである。

昭和五年五月十七日印刷
昭和五年六月二十日發行

著 作 權



所 有

唯物論・無神論

〔定價壹圓五十錢〕

著 者 佐 野 學

發 行 者 東 京 市 牛 込 區 早 稻 田 鶴 卷 町 四 七 一 市 川 義 雄

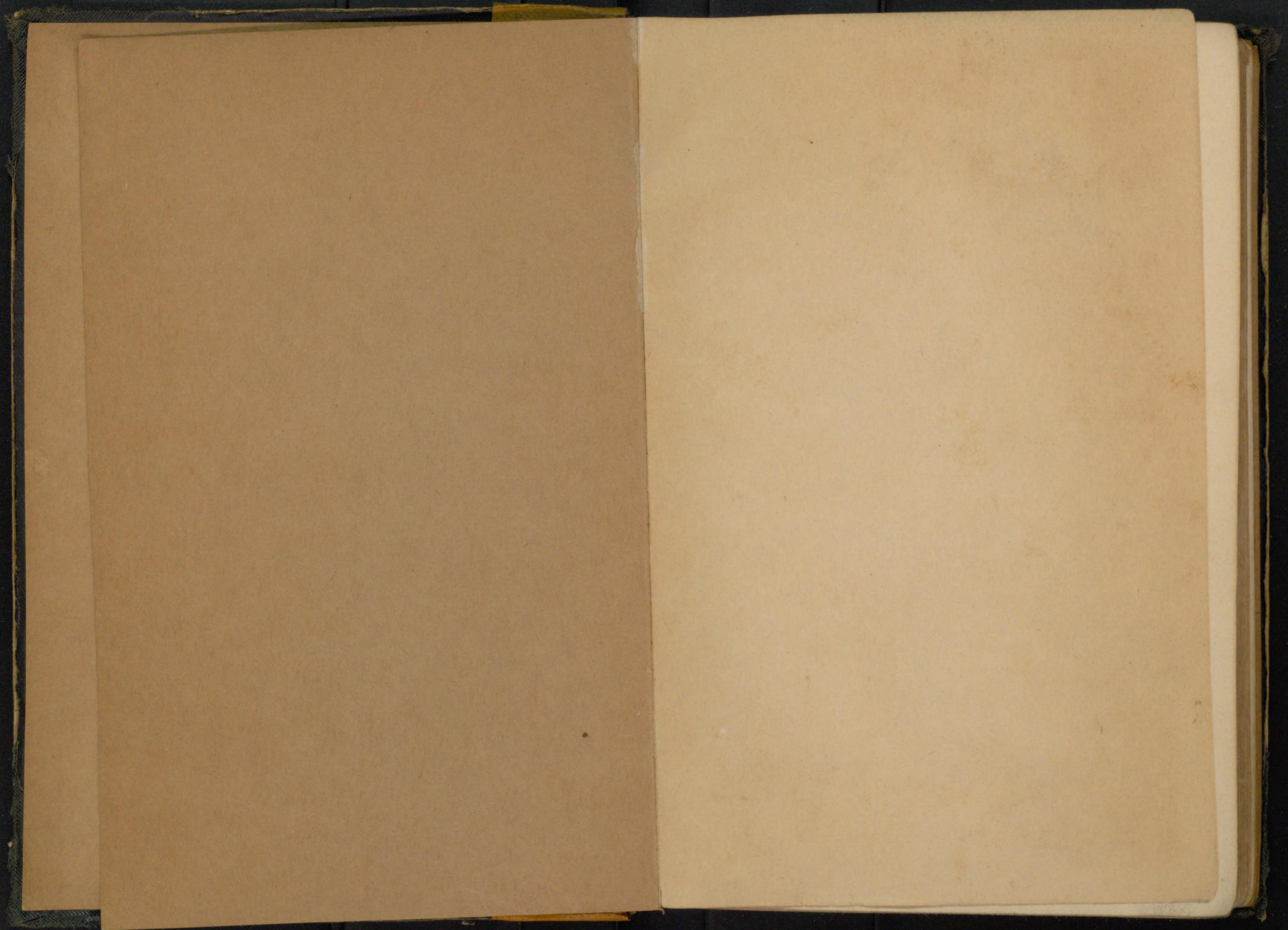
印 刷 者 東 京 市 外 下 戶 塚 二 四 〇 內 田 廣 藏

發 行 所

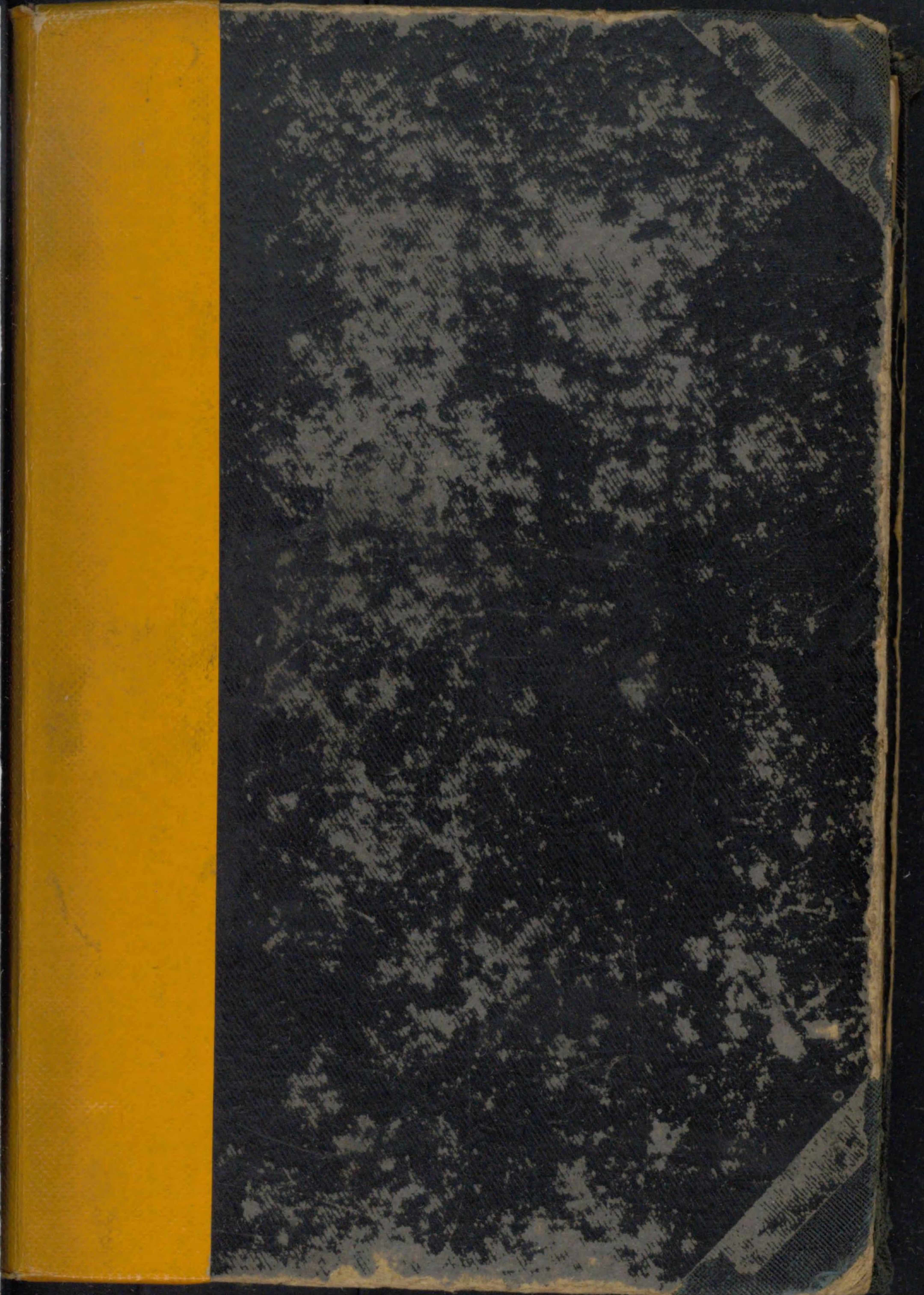
東 京 市 牛 込 區 鶴 卷 町 四 七 一 振 替 東 京 六 七 五 一 九 番

希 望 閣

【行印所刷印原萩】



607
108

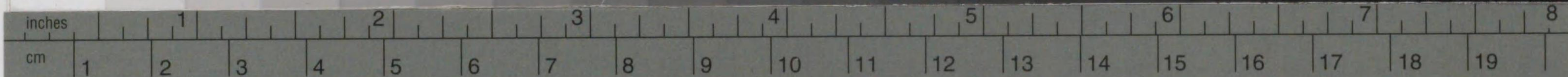


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

